

## 第1回講座 近代の二ヶ領用水と川崎の水道

日時 平成18年9月28日(木)

会場 川崎区役所 7階会議室

講師 長島 保 氏



**講師略歴：** 県立川崎高校で長年教鞭をとる。退職後は、地域史の研究者として、川崎市の市民アカデミー、各区の市民館での講座、各地区での歴史研究会などの指導にあたり、川崎市史の編纂にも関わる。現在はNPO法人多摩川エコミュージアムの代表理事を務め精力的に活動。かわさき産業ミュージアム専門委員も務める。

皆さん、こんばんは。講座を始める前に一言。三言、四言になるかもしれませんが、私は東京の大田区に住んでいます。皆さんと同じ水道の水を飲んでいいますので、そういう意味では川崎市民です。いつも自己紹介のときに、東京に住んでいる川崎市民ですと申し上げています。実際には、この川崎で川崎の市民の方々といろいろなことをずっと退職後もやらせていただいていますので、東京都民というよりも川崎市民、そしてこの川崎が大好きです。そして同時に、東京と川崎の間を流れている多摩川が大好きなんです。

川崎は、実は日本史の中で重要な役割を果たしてきました。その重要な役割とは、京浜工業地帯発祥の地です。今日いみじくもラゾーナという大商業施設がオープンしました。皆さんご承知のように、この地一帯は近年まで、東芝川崎事業所が広がっていました。私らにとっては、東芝堀川町工場と言ったほうがなじみが深いところですが、東芝の前身が東京電気であり、再来年はその東京電気が川崎の地にやって来て100年を迎えます。

ラゾーナの隣に、既にソリッドスクエアや産業振興会館など高層ビルが建っており、テクノピア川崎という新しい街区になっています。実は東芝が来る1年前に横浜精糖、明治製糖がやってきていいますので、来年は明治製糖が移ってきて百年になります。横浜精糖、明治製糖、東京電気の東芝も、この川崎の地に近代工場としていち早くやって来て、工都川崎の礎を築いてきました。歴史的なことを振り返って100年になるわけですから、そういう意味で何とかもう一度この工都川崎の歴史をいろいろ振り返ってみる必要があるのではないかと、そのように思います。

川崎には工都川崎として生まれてきた様々な近代遺産、産業遺産があり、それを十分活かしながら、市民が歴史を学べるような工夫をしたらどうかということを言っていました。

そのような縁で産業ミュージアムという形で、今は企業の方々の参加もあり、いろいろな試みがなされております。来年、再来年は工都川崎発祥100周年であるということのを頭の隅に入れておいていただきたい、そして工都発祥100年イベントが実施できないか、あるいは今新しい町に変わったどこかにモニュメントなどを立てられないものだろうかと考えています。川崎が産業都市として発展してくる中でいろいろなことがあり、日本一の公害都市になったことなどありますが、負の問題も含めて、川崎の工都川崎としての歩みを一步一步歴史的に確かめていく必要があるのではないかと思います。

今日は、最初の講座ということで、「近代の二ヶ領用水と川崎の水道」というテーマで話をしま

す。川崎の水道に関しては、二ヶ領用水との関わりを少し掘り下げながら、触れてみたいと思います。

## 1. 二ヶ領用水は、いま（産業遺産との関わり）

写真は高津区久地にある円筒分水です。ここは桜のときは周りが見事になります。補修工事をやっています、終わったのかもわかりませんが、この周辺を史跡公園のような位置づけで整備するようです。



円筒分水

二ヶ領用水は2口の取水口があります。川から水を取り入れるには堰を設け、川をせき止め、川よりも高いところに水を上げます。これは2つありまして、一番上流の上河原、町の名前でいうと多摩区布田です。布田というのは対岸にもあります。多摩川の流れが変わって布田を分断してしまっただけです。その字名の上河原にあるので、最近の上河原堰とか上河原堰堤と言っています。



上河原堰堤

それから、今度はずっと下流の宿河原堰です。これが1999年に改修された宿河原堰です。左側には魚道があります。右手の狛江側にもこれと同じような魚道があり、たくさんの鮎が今年も遡上しました。



宿河原堰堤

これが宿河原堰から取り入れている宿河原線です。左手のところは水門になっており、多摩川が増水するたびに閉めるのですが、この宿河原線はここから下流まで約1.5キロ両岸が桜並木です。地元の方々が桜並木を守り育ててきました。護岸工事は、親水公園にしていますので川崎市がやり、並木のほうは市民の手でやりました。

これは上河原線の中に乱杭堰といって杭を打ち込んで、この杭と杭の間に粗朶やツルクサなどを入れてせき止めます。間に入れるものがみんな枯れて歯抜けじいさんみたいにそのまま流れていますが、ここでせき止められて水位が高くなった水が、右手のところには2本石が立っていますが、取り入れ口があり、あそこから用水堀へ入っていきます。これは復元したものです。今はこういう形で復元して残っています。



乱杭堰



宿河原線

これは宿河原線のほうです。ずっと下っていきますと両側が桜並木で、このあたりが景観として一番秀気がいいです。下流へ来てしまうと石ころがいっぱい置いてあったり、下に下りる階段があり、遊歩道があり、全然だめなんです、ここはわりあい自然の情景が、農業用水としての面影を残してくれている場所です。ここは私が一番推奨するところです。先ほどの宿河原堰からずっと遊歩道が続いていますから、ここを歩くと桜の季節はいいです。ただし、土日ですと大変な人出で歩け



親水護岸



たものではないのです。あちらこちらでお花見客が、花見どころではなく、お酒とご馳走で騒いでいます。1年に1回だからいいんでしょうが。

ここからちょっと川崎の水道に関係するものをご紹介します。

最初の川崎町営水道の戸手浄水場です。これはパンフレットから撮ったものです。

これが中原区上平間にある平間浄水場で、日本最初の工業用水道です。後の二ヶ領用水と深いかかわりを持っています。

これは三保ダムです。三保ダムというのはロックフィルダムといって、岩石を積み上げたダムで裾野がすごく広く、緩やかな傾斜をしていて、右手のほうへずっとダムの裾野が広がっています。ダムの裾野が草地になっていて、そこへ遊歩道が大きくつづら折りになって下へ降りていきます。裾野全体がダム広場公園になっていて、すごくいいところで、秋はすばらしいです。三保ダムと、丹沢湖はこの手前のダムの内側にずっと広がっています。

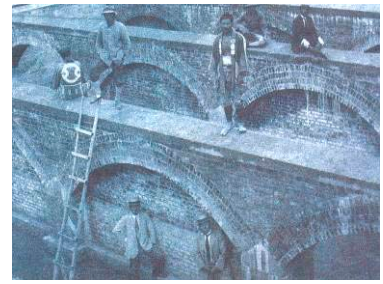
これが最近できた宮ヶ瀬湖です。大変な広さを持っており、今までの相模湖、津久井湖、丹沢湖、この3つの水を合わせてもこちらのほうが多いのです。宮ヶ瀬湖によって神奈川県の水がめは一気に倍に膨れ上がりました。余浄水とは言わないですが、余裕水があり、宮ヶ瀬ダムの水はほとんど使われていません。これは国土交通省が管理をしており、水飢饉になったときは大きな役割を果たし、神奈川県は水の心配は全くなりませんでした。

現在、二ヶ領用水は農業用水としての歴史的役割をほぼ完全に終え、もう産業遺産です。そのような意味では産業ミュージアムとして語るのに格好の材料です。今、お見せした円筒分水や、いろいろな堰、これはみんな産業遺産です。中でも円筒分水は、川崎で登録文化財制度ができて初めての登録文化財です。登録文化財というのは、登録文化財にしたいほうが届け出ます。登録文化財に指定されたということではなく、文化庁に届け出て登録するだけの話で、文化庁が指定するものではありません。川崎市は、この登録文化財制度をまだあまり活用していません。私が住んでいる大田区はどんどんやっています。産業遺産だけでなく、住宅など様々な分野を含めて登録できますので、ぜひ活用したほうがいいと思います

## 2. 近代の二ヶ領用水

### 【400年余の歴史を刻んだ用水堀】

二ヶ領用水は400年の歴史があります。慶長2年に測量が始まり、慶長16年に完了し、14年間かかって開削されました。その工事の指揮をとったのが小泉次大夫ですが、大事なことは小泉次大夫が造ったのではなく、小泉次大夫の指図を受けて、多摩川流域の農民たちが力を合わせて造り上げました。同時に、川崎だけではなく、私が住んでいる対岸の大田区、世田谷区、こちら



戸手浄水場



平間浄水場



三保ダムと丹沢湖



宮ヶ瀬湖

にも六郷用水というのがあります。世田谷領、六郷領を流れていますので、向こうも二ヶ領用水なんです。こちらは稲毛領、川崎領の二ヶ領で、合わせて四ヶ領用水なんです。ですから、多摩川兩岸に開削された四ヶ領用水の一つが川崎、稲毛、二ヶ領用水だということです。

この用水堀は神奈川県内では一番古い用水堀であり、この用水を延々と400年にわたって守り続けてきたのは、やはり地元の農民たちでした。江戸時代から用水組合をつくって維持管理をしてきました。この用水、特に川崎二ヶ領用水から用水を受益していた村々は60カ村にのぼりました。川崎の村々の大部分はこの恩恵にあずかっていました。ですから、川崎が細長く市域が形成されたのも、この二ヶ領用水がもとになります。よく多摩川と言いますが、多摩川ももちろんですが、多摩川からの水の利用の仕方、それによって川崎の市域がうなぎの寝床みたいに細長くなったということです。

### 【横浜水道への分水問題】

二ヶ領用水が明治に入って真っ先に直面するのが横浜水道への分水問題でした。今の桜木町周辺は、みなとみらいという町に生まれ変わっていますが、そこに横浜村というのがありました。戸数約100軒ちょっとで、その農民たちが追い出され、元村に行きました。現在は元町と言っています。そこへ移動させられ、俺らは横浜村の元村だといって向こうで村を築いたのです。そして、元の横浜村はどうなったかといいますと、日米修好通商条約を初めとする、あの一連の条約で開国し、そして港を築かれたわけです。その開港場には、大勢の外国人たちの居留地ができました。

そこで、一番の問題となったのは何かというと飲み水です。最初は船で運んでいましたが、それには限界があり、水道を引くことになったのです。当時、神奈川県は多摩川に目をつけました。多摩川の二ヶ領用水にして、二ヶ領用水から延々と水道を引こうという計画を立てました。

最初の案が久地の分量樋付近です。いまの円筒分水よりも150mぐらい上流に、昔から分量樋といって、四筋に分ける樋がありました。その分量樋の下流あたりから延々横浜まで引こうというのです。当時の距離でいうと8里(32キロ)もあります。途中、山を越えなければいけない、トンネルを掘らなければならないと大変でしたが、もっと大変だったのは、二ヶ領用水を水道に使われたのでは困ると、二ヶ領用水を使っている農民たちから猛反対が起きたことです。県は何とか地元を説得しようとするのです。当時、二ヶ領用水の大総代をやっていた人、今は鶴見区市場、当時は市場村の名主をやっていた添田知通です。この添田家は、用水の大総代だけではなく、川崎領の寄場組合の大総代をやっていました。川崎領のリーダーです。ところで鶴見の市場村も、潮田村も、当時は川崎領で、鶴見川の左岸までは川崎領、尻手も矢向もみんな川崎領なんです。自分が総代なので、何とかこの揉め事を解決しなければいけないということで、新しい提案をしました。それは、もっと下流のほうで取ればいいのかと、二ヶ領用水の川崎堀が下流に来て大師堀と町田堀に分かれるところがあり、鹿島田の堰の下あたりから取れば、大勢の農民も文句を言わないだろう、同時に横浜までの距離がずっと近くなるし、平地を送水すればいいわけですから。同時に、添田知通の考えは、二ヶ領用水の管理費を横浜水道に持ってもらい、年間用水費の3分の2は出してもらおうというものでした。経済的なこともあり、鹿島田堰の下のほうから取ったらどうかと提案したら、県もそれにのり、全面的に添田の案でやろうということになりました。

水道を引きたい、水道会社をつくるという人たちが盛んに出てきました。横浜の商人、大倉喜

八郎や原善三郎、添田七衛門もその1人に入ります。それを一本化させ、結局9人の発起人で横浜水道会社というのがつくられます。

送水のしかたは、これがまた問題なのですが、鉄管ではなく、木樋管といって、木をつなぎ合わせた筒でできています。この木樋管は、現在、横浜市水道局の西谷浄水場の中の水道資料館にこの横浜水道の木樋管の残りというか、筒が展示されています。何年か前まで、川崎にも残っていたのですが、ガレージの横に積んであって、邪魔だからと燃やされ、処分されてしまいました。ミュージアムの1つの目玉になると思っていたのですが、残念ながら川崎に残っていた木樋管は消えてしまいました。

木樋管は継ぎ目があり、そこから水が漏れてしまうので、せつかくの水が横浜まで着く間に半分ぐらいなくなってしまいます。最初目論見どおり行かず、横浜水道会社は経営が成り立たなくなり、横浜の町会所に管理を委託しました。町会所は公的機関なので赤字を背負いながら、10年ぐらいは木樋管水道が続きました。そして明治19年に、結局横浜では二ヶ領用水からの横浜水道は諦め、道志川水系の水道にきり変えるわけです。それが日本で最初の近代水道だと言われています。

【用水組合の制度化】

江戸時代は地域の村々が結合して用水組合をつくって維持管理をしていました。これは極めて自治的なものでしたが、明治になると地方制度が改革され広域の村や町ができ、近代の行政が用水組合を管理していこうという方向に変わっていきます。明治23年、国は水利組合条例を制定し、これに基づいて県が行政指導をしながら、各地域の従来の用水組合を近代的な普通水利組合へ組織替えていくことを始めます。

ところが、この川崎では、おいそれとすぐにはいかず、いろんな揉め事があり、普通水利組合ができるまで7年間かかりました。何で揉め事ができたかというのは、資料の「二ヶ領用水 400年」という、神奈川新聞に連載で仲間と一緒に記事を書きました。「門戸開放に待った」、「揉めた組合設立」ということで、実はこの二ヶ領用水は、農業用水だけではなく、生活用水や産業用水に使われていました。明治末から大

正にかけては工業用水として使われるようになり、用水組合の農民たちは、氷を作っている連中だっているじゃないか。そういう連中からも組合費を取るべきであるというようなことで、用水

神奈川新聞 1997年(平成9年)10月30日 木曜日

(21) 川崎

# 「門戸開放」に待った

## 揉めた組合設立

1997年(平成9年)10月30日

一八九八(明治三十一)年、町会所は、よりよく水を創設委員会を組織し、橋本部長を普通水利組合設置を推進し、代に指名し、務めていた安委員が、県知事に上申した。だが、た、県会規約によって変更された。かね、農業町の利害対立など、審議を経て、普通水利組合の設立は、したあと、た立をめぐって県局と対立一向に進展しない。そのため、だに設立を希望していた地、創立委員たち、県会から申しこ、可の申請書を、県の指し通りに調整で、設立の動きを急げ、た、県会に提出された。

その後も、一八九〇(明治二十三年)に、多額発行から七年もつた。た、一八九七(明治三十年)、規約第四案の「選挙人八歳以上、二十歳以下(男子に限る)」か町村用水普通水利組合は、名称を鶴毛川二ヶ領用水普通水利組合と改め、用水普通水利組合と改め、た、二八八(明治三十三年)六月、町組合が第四案を除く申請可を求め、の申請が提出され、翌七月、県会が第四案を除いて認可した。合わせて発せの白

1900(昭和5)年当時の鶴毛川二ヶ領用水普通水利組合の会議員と職員、設立当時の関係者もも出たらば、「二ヶ領用水」から「二ヶ領用水事業」から規定から脱していた。これに対して、町組合は問題化し第四案の削除の部長提案、否決して、県の再三の督促を無視し続け、た。この、創立委員総代の安委員部長、その責任を

問われて更迭されたわけだ。この間、鶴毛川二ヶ領用水普通水利組合は、名称を鶴毛川二ヶ領用水普通水利組合と改め、用水普通水利組合と改め、た、二八八(明治三十三年)六月、町組合が第四案を除く申請可を求め、の申請が提出され、翌七月、県会が第四案を除いて認可した。合わせて発せの白

鶴毛川二ヶ領用水、両用水普通水利組合の普通水利組合の普通水利組合は、名称を鶴毛川二ヶ領用水普通水利組合と改め、用水普通水利組合と改め、た、二八八(明治三十三年)六月、町組合が第四案を除く申請可を求め、の申請が提出され、翌七月、県会が第四案を除いて認可した。合わせて発せの白

川崎・幸・中原・高津・宮前・多摩・麻生



を使って生業を営んでいる人たちからも組合費を取ろうとしました。

組合員の資格は、満20歳以上ならだれでも組合員になれると決めました。それが第4条です。ところが、国や県の政策は違い、用水だから土地の所有者に限るといい、その1項が入らなければ、この用水組合の規約は認めないということで県と対立しました。いきさつを詳しく話していると時間がかかってしまいますが、地元の農民たちを説得できなかったということで安達郡長が後に更迭されてしまうという事件が起きるんです。それほど二ヶ領用水組合が普通水利組合になるときにはいろいろありました。

その結果として、水利組合は二つ成立します。一つは稲毛川崎二ヶ領用水普通水利組合、それから大師河原村外四ヶ町村用水普通水利組合といい、何で上流のほうと下流のほうで二つできたのかというのは、特に下流域が水不足でずいぶん苦しんできており、そういう意味では特殊な用水利用などの慣行があり、一緒にならないで二つに分かれたようですが、実際のところはいろいろな文献を調べてもわかりません。この近代の二ヶ領用水のことの解説を書いた嶋村龍蔵さんも、資料不足で解明できないというようなことを言っています。地元にも資料がなく、戦災でいろいろ焼けてしまったり、なかなか見つかりません。とにかく二つの用水組合ができたという事実だけ伝えておきます。

### 【多摩川治水と用水組合】

多摩川は、普段はおとなしいのですが、いざ大雨が降ると暴れ狂う、そういう川です。氾濫、洪水の絶えない川であり、時には日照りが続くこともあり、水不足になるときもありましたが、氾濫、洪水のほうは圧倒的に多く、毎年のように出水しています。

それに対して、特に明治の後半は、行政の治水対策が遅れます。なぜかというと、明治の後半は戦争ばかりで、日清戦争、日露戦争、そして大正初期の第一次世界大戦、10年おきに戦争をやっていました。私は、日露戦争当時の内政費と軍事費の比較をしたことがあります。軍事費はどんどん上がり、内政費はどんどん削られているんです。日露戦争は、借金でやった戦争です。借金して戦争するという馬鹿な時代がありました。外債と内債で7割が借金です。とにかく明治後半は治水がおろそかにされたために、全国的に大規模な水害が発生しました。

川が暴れても、人間の生活に被害を及ぼさない限りは、単なる洪水でいいのですが、被害を与えるようになると、水害になるわけです。特に明治40年、43年の水害は大変なもので、いまだにこの二つを上回る水は多摩川では出ていません。このとき政府は何ともしなければということで、明治44年に臨時治水調査会を設け、全国から65河川を選んで、国の直轄河川にして、河川改修を国庫負担でやっていくことを取り決めます。

ところが、お金がないから一気にできず、第1期河川、第2期河川と二つに分けて、第1期河川20河川、第2期河川45河川、多摩川は第2期に入ったので、すぐには堤防工事をしてもらえず、第1期工事が終わった後の18年後ということになります。そこまで待てないということで、大正の初めごろにアミガサ事件と呼ばれる築堤運動が起き、地元の人たちの運動の結果、多摩川下流での改修工事が早まりました。川崎の我々の先輩たちが動いてくれたから今のようになりつかりした堤防が早く実現しました。そのような運動に、近代の二ヶ領用水の組合も全力投球しました。これは大事なことだと思います。最初は、府県境界、東京府と神奈川県との境界が、飛び地があって入り組んでいて大変でした。飛び地があるために、統一的な治水対策が行政の上で行えないということです。そこで何とか府県境界をきちんと確定してほしいという運動が起こり、二





ム反対運動を起し、神奈川県をつついて大問題になりました。結局、東京市は工事ストップに追い込まれ、半年どころか1年経っても2年経っても工事が進んでいかないという問題になりました。小河内周辺の農民たちは移転先まで見つけていたにもかかわらず、補償金も何もおらず、田畑は水没してしまうのだからと耕しませんでした。このような社会問題が、突如として二ヶ領用水の用水組合の人たちが猛反対したことがきっかけでおこったのです。

二ヶ領用水のほうは、東京のほうが何の相談もなしに勝手に決めたわけでしょう。当然、水利権を主張する理由があり、そのいきさつは、石川達三が『日陰の村』という本の中で実に克明に書いています。ぜひお読みください。事実を積み上げていく、そういう手法で書いてありますから迫力があります。

### 【多摩川右岸農業水利改良事業】

水利紛争の結果、いろいろあり結局最後は東京と神奈川は手を結び、小河内ダムがOKになります。そのかわりに、神奈川県に対して補償金として150万円を支払うということになりました。二ヶ領用水にとって、そのお金はのどから手が出るほど欲しい大きな金額で、その150万円を資金にし、神奈川県が40何万か上積みして、全部で193万2000円で多摩川右岸農業水利改良事業を県営事業として始めます。このときに二ヶ領用水のいろいろな施設が大改良されたのですから、小河内ダムの紛争と引き換えに、二ヶ領用水の改修ができたということになります。

そのときに、先ほどの上河原堰堤、宿河原堰堤が、今までは蛇籠堰（竹で編んだかごの中に石ころをたくさん詰め込んだ堰）で、大水のたびごとに壊れるんです。ところが、昭和11年から24年にかけての大事業で、壊れない鉄筋コンクリートの堰に改良されました。

それから、円筒分水は昭和16年に造られています。平瀬川を津田山の土手腹をぶち抜いて多摩川へ直接放流したため、ちょうど二ヶ領用水とぶつかってしまうので、二ヶ領用水はその下をくぐって円筒分水の真ん中に出てくるというサイホンの原理の応用、つまり江戸時代からの伏せ越しという方法で川の下を潜らせたのです。円筒分水も、平瀬川の改修工事も、さらに上流の三沢川の改修工事もこのとき一気に行われました。それから、二ヶ領用水はさんざん蛇行しながら流れていましたが、このときに全部直線化されました。両岸もコンクリートになりました。このようなことで多摩川右岸農業水利改良事業は二ヶ領用水の近代化の上で重要な役割を果たしたと言えます。

### 【川崎市への移管と組合解散】

川崎では、昭和に入ってから水田をやっている農民がどんどん減っていきます。工都川崎が進んだからで、工場がどんどん進出し、都市化が進展しました。すると、特に下流のほうから田んぼが工場敷地になっていきます。さっきお話した東芝や明治製糖は田んぼではなく、河原同然の土地が選ばれ、広大な敷地を安く買い取って建てるわけです。しかし、そのうちだんだんと農地も工場に売却していくようになります。特に昭和12年の日中戦争が始まる時期に南武線の沿線に大きな工場が進出します。あのときかなりの農地が工場の敷地に変わります。

その前提となったのが耕地整理事業です。耕地整理というのは、くねくね曲がっている水路を真っ直ぐにしたり、田んぼの畦をきちっと方形にしたり、そのようなことをやるための法律です。都会での耕地整理はそうではありません。日本は都市計画がすごく遅れていて、都市計画の区画整理事業を進める法律がなく、農耕地の耕地整理の法律を利用して、組合をつくり農地の区画整



理をやっていききました。川崎町では大正6年ぐらいから第1耕地整理組合、第2耕地整理組合と、いろいろ始まります。そのようなことは全部農耕地の整理という名目でやりますが、実際は水田をやめ畑地に変えていき、将来宅地や工場用地にすることを見通してやるわけです。耕地整理が多摩川の川崎側の右岸だけではなく、反対側の東京の左岸、私が住んでいる大田区、大森、蒲田、羽田でも耕地整理が始まります。そして大正の半ばから始まる多摩川の改修工事と連動しながら耕地整理が進められ、一気に土地の区画整理が行われていきます。そのような歴史的な前提があった中で、工場の進出や都市化というのが考えられなければなりません。

農耕地を手放した人はどうしたかという、工場で人をどんどん雇ってくれるので給料取りになりました。ところが用水組合というのは、組合に所属している組合員が反別賦課金といって一種の組合費を払うことで財政が成り立っています。その組合費を払う人がどんどん減っていき、それにかわり用水路の修繕などで毎年のようにお金がかかるわけです。農民が減ろうが減るまいが同じようにかかり、どうにもならなくなりました。何とかしなければならぬと、たまたま県で大掛かりな改修工事をやってくれたので、用水組合は一文も使わないで済みましたが、今度はそうはいきません。

そこで用水組合が大変財政的に困っているということに目をつけたのが川崎市です。二ヶ領用水は余剰水があり、その余剰水を工業用水に回してもらおうと働きかけてきたのです。組合のほうも最終的には、二ヶ領用水の維持管理は全部市に任せてしまうということを決めます。昭和16年、組合で決議します。

その後、用水組合は解散したかという、解散はせず、3年後に解散しました。わざわざ3年後にしたというのは、県から許可されていた用水の水利権がちょうど切れるのが昭和19年12月31日だったので、それが切れるまでは解散は待とうということにしたのです。こうして延々三百年続いた二ヶ領用水組合はここに幕を閉じ、以後、川崎市が管理するということになります。

その後、戦後いろいろな問題がありますが、現在は農業用水としての役割は全くありません。水利権はあります。ただし、一概にはそうとは言えず、宿河原の堰のほうは農業用水としての水利権はなく、工業用水としての水利権もありません。あるのは河川維持水です。最近、法律が変わり、河川は環境用水に位置づけられたのです。都市の生活、周辺の人たちの生活に潤いを与える水辺というのは大変大事なものだということです。河川を維持する環境用水としての水利権は宿河原堰にはあります。上河原堰は、夏と冬で水利権が違うんです。夏は $3.887 \text{ m}^3$ 、これは毎秒です。冬は $3.133 \text{ m}^3$ 、夏と冬で違う。そして、工業用水が $2.350 \text{ m}^3$ 、これはトンに置き換えてもいいと思います。それから、河川維持水が $0.5 \text{ m}^3$ 。宿河原堰は、河川維持水、環境用水だけで、これが $0.900 \text{ m}^3$ ということです。これはごく最近、河川局からデータを送ってもらってわかった結果です。

田んぼもずいぶんなくなってしまいました。川崎の水田は中原区まではもうなく、高津区から北のほうでは若干残っているのではないのでしょうか。川崎で水田を見たいという方は、農業振興地域である麻生区の黒川へ行かれると、水田がずっと広がっている景観に出会えます。

### 3. 私たちが飲んでいる水は、どこの水？

私たちが飲んでいる水はどこの水でしょうか。川崎の水は一体どこから来ているのでしょうか。

最初は多摩川でしたが、今はそうではありません。相模川も、酒匂川の水も入っており、我々の飲んでいる水というのはブレンドされているんです。それを言いたかったために、どこの水を

飲んでいるのですかと質問しました。

図を見てください。「川崎市の水源地と水道施設」、これは子ども用に作られた「川崎市の水道」というパンフレットで、小学校中学年の生徒たちが学習用に利用しているものです。

学習用で大事なもののなのに誤植があるんです。津久井湖の絵のほうに津久井ダムとありますが津久井ダムと言わないんです。城山ダムです。ここに水道局の方がいたら、ぜひ来年直すように言っておいてください。

これを見ますと、今神奈川県内には四つのダムがあります。最初は、川崎の水道は、川崎町水道、町営水道として大正10年に設置されました。多摩川も宮内というところから表流水を取りまして、いまでも残る水道道路を経て、幸区の戸手、今の幸区役所や文化センターがある戸手浄水場へ送り、そこで水をきれいにして、川崎町一帯に水道を配水しました。

川崎がまだ町の時代でした。やがて大正13年に川崎市になり、人口も増え、三つの町村が合併して、5万人の市ができたわけです。そうすると、水道も拡張していかないとなりません。川崎は、人口の増え方がすごく、どんどん工業都市化していきます。特に川崎町、田島村の人口の増加がすごいです。それに付随して良質の水が飲めることが必要になってきます。

最初のころは、川崎は水が汚いから住みたくないといって、工場に勤めている人は、大森や蒲田、鶴見、そのようなところに家を構えて通勤し、なかなか引っ越してこないというような時期が一時期ありました。特に明治の終わりごろからコレラやペストの伝染病が流行って大騒ぎになり、初代の市長になった石井泰助さんが、何とか水道を引かなければというので大奮闘をしまして、町会議員を全部水道委員にして、水道建設をやります。

とにかくもっと能力のある浄水場が欲しいというので生田の浄水場ができます。生田の浄水場は今も顕在で、地下水の浄水をしています。それから二ヶ領用水の上河原取水堰のところに、稲田取水所が、そこは浄水場ではなく稲田取水所は工業用水の取水所ということになっています。生田浄水場に送水されて浄水されます。

ところが、人口の増え方が大きくて、多摩川の水だけではなく、ほかに水源を求めざるを得なくなり、相模川水系に求めました。そのときに、県が動いて、相模川河水統制事業というのが県営事業で始まり、相模ダムができます。

相模ダムができたという第4次拡張事業というので長沢浄水場が開かれ、このときに、ゆとりがあるということで、東京都へ分水することになります。これが今、多摩水道橋を渡って東京都へ1日約22万トンを送水しているのです。私はそこから来ている水を飲んでいるということになるんです。東京都は、ただでもらっているのではなく川崎市から買っています。川崎はほんとうに水に恵まれています。人口が増える中で、先を見越して、水道事業を拡張してきました。

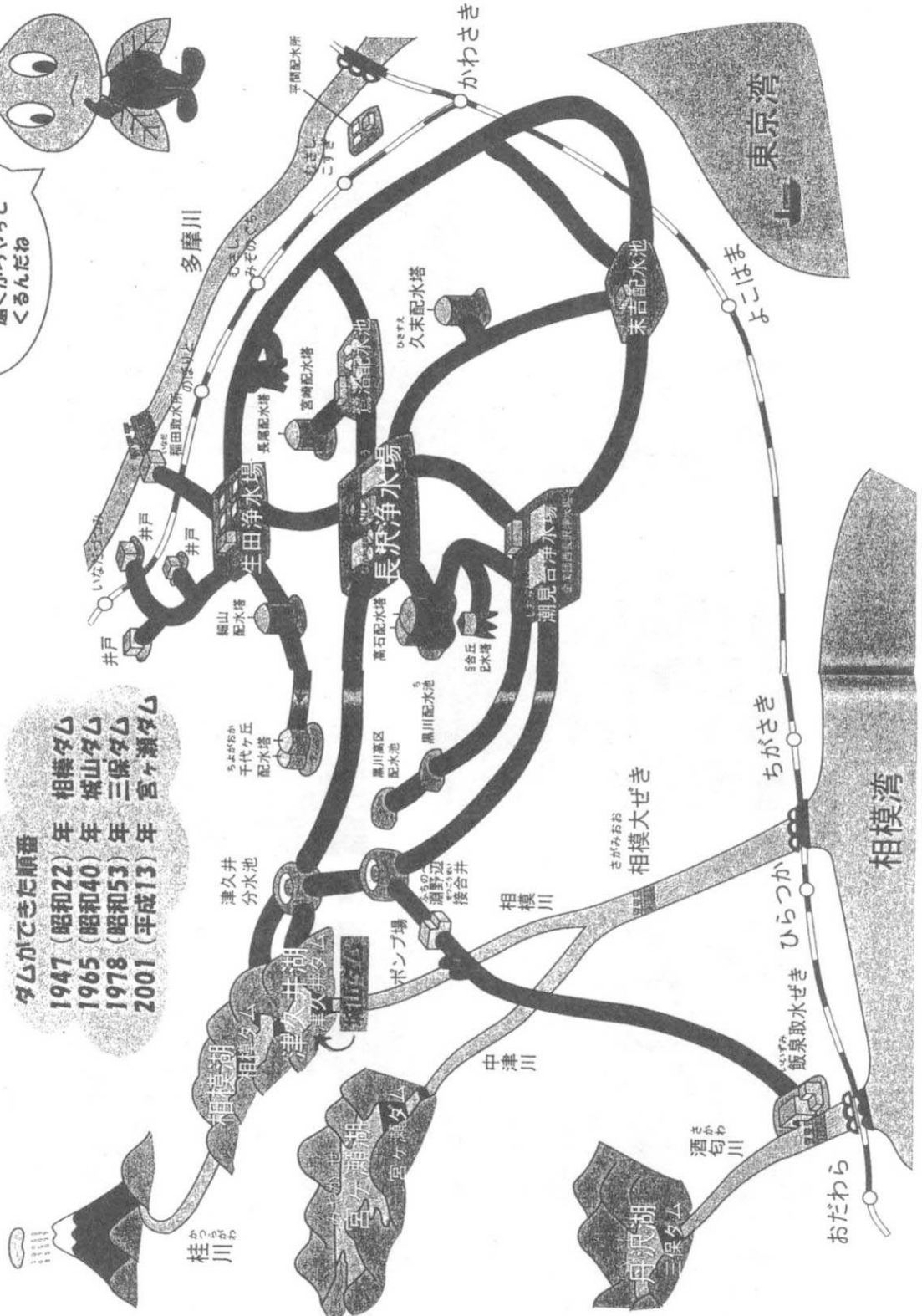
もう一つの資料で「川崎市の水道創設拡張事業一覧」というのを入れておきました。ここに数値的なことを記しておきました。最初の創設事業、戸手浄水場のときは給水能力がたった3320m<sup>3</sup>だったのが、今や第8期拡張事業により丹沢湖ができ、県内の広域水道事業団から受ける水を入れて、何と102万6000トンの水を供給しています。現在はこれよりも少し数字が上がっているはずですが。

〔川崎市水道局編『川崎市の水道』（2006年版）から〕

# 川崎市の水源地と水道施設

ダムができた順番

1947	(昭和22)	年	相模ダム
1965	(昭和40)	年	城山ダム
1978	(昭和53)	年	三保ダム
2001	(平成13)	年	宮ヶ瀬ダム



三保ダムが完成してから、川崎市及び神奈川県の水は本当に潤沢になりました。昨年11月か12月ごろ、宮ヶ瀬ダムの見学に行きました。とにかく大きなダムで、従来の3つのダムを合わせたよりもやや多い1億8000万トンになります。神奈川は30億トンを超える水を貯水できるんです。ですから、余剰水ではなくて、余裕水であり、半分は余裕水なんです。あと何十年は水資源の開発をやらなくても済むのではないかと思います。

そして、先ほどの子ども用の図ですが、そこにはいろいろな導水線や送水線、浄水場、あるいは配水塔があります。特に丹沢湖、三保ダムの水はどこから取って送水しているかという、小田原の地から、ずっと酒匂川の下流、ここに堰を設けています。飯泉取水堰で取り、導水管で送ってきて、潮見台浄水場に入ってきます。この潮見台浄水場の中に、企業団西長沢浄水場というのがあります。これが飯泉取水堰から来る水を浄水する施設です。このように、川崎では長沢浄水場と潮見台浄水場の2つの巨大な浄水場があり、十分すぎるぐらい水を賄うことができます。

川崎の今までの水の需要は、圧倒的に工業用水が多く、一時期は全需要の60%を占めました。ところが、近年になってそれが様変わりしました。工場が水を使わなくなったわけではなく、今まで湯水のごとく使っていた水を節約するようになり、同じ水を何回も使うようになり、水道局から前のように水を買わなくなりました。水道局の会計は独立採算制で売れなければ困るので、商売をやりたいわけです。近年になって水道料の値上げをし高くなりました。水が余っているのになぜ高いのか。余裕があるのに料金が高くなった。そのような矛盾をはらみながら、私たちは水道の水を使っているのです。皆さん、水をもっと無駄遣いしましょう。そして、水道局の財政を助けましょう。最後はちょっとコミカルなことを言いました。これは冗談ですから本気にしないでください。ご清聴どうもありがとうございました。



## 神奈川県内の四つのダム

〔川崎市水道局編『川崎市の水道』（指導用手引き・2005年版）から〕

ダム名 (湖名)	1. 工事名 2. 期間 3. 費用	有効 貯水量	水没した町村名	水没世帯数	水没面積
相模ダム (相模湖) 1947(昭和22)年 6月14日完成	1. 相模川河水統制事業 2. 1938年～1949年 (昭和13)(昭和24) 3. 27億円	万㎡ 4,820	日蓮村(現藤野町)勝瀬地区 山梨県島田村(現上野原町)	136世帯	210ha
城山ダム (津久井湖) 1965(昭和40)年 3月31日完成	1. 相模川総合開発事業 2. 1961年11月～1965年4月 (昭和36)(昭和40) 3. 904億円(城山ダム98億円)	5,120	城山町中沢 津久井町荒川、小網、布津倉、三井 相模湖町沼本	※3 280世帯 1,435人	※3 290ha
三保ダム (丹沢湖) 1978(昭和53)年 7月28日完成	1. 酒匂川総合開発事業 2. 1969年度～1978年度 (昭和44)(昭和53) 3. 2,891億円(三保ダム823億円)	5,450	世附、神尾田、落合 中川、玄倉	※2 223世帯 1,026人	218ha
宮ヶ瀬ダム (宮ヶ瀬湖) 2001(平成13)年 3月完成	1. 宮ヶ瀬ダム建設事業 2. 1971年度～2001年度 (昭和46)(平成13) 3. 3,993億円	18,300	津久井町鳥屋、青山、長竹、根小屋 相川町田代、半原 清川村宮ヶ瀬、煤ヶ谷	※1 281世帯 1,136人	※1 490ha

参考資料 ※1 バンフレット「相模川・宮ヶ瀬ダム」  
※2 「丹沢湖」(神奈川県新聞社発行)  
※3 「津久井湖誕生」(神奈川県新聞社発行)

## 川崎市の水道創設拡張事業一覧

〔『川崎市史・通史編4』から〕

第5表 水道創設拡張事業一覧

事業名	水源	事業期間	給水能力計画 (㎡/日)	給水人口 (人)
創設事業	多摩川表流水 (宮内水源地)	大正8年4月 ～ 10年3月	3,320	40,000
第1期拡張事業	多摩川表流水 (宮内水源地)	大正14年8月 ～ 15年3月	8,340	60,000
第2期拡張事業	多摩川伏流水 (宮内水源地)	昭和5年3月 ～ 6年3月	16,670	100,000
第3期拡張事業	多摩川伏流水 (稲田水源地)	昭和9年2月 ～ 14年3月	50,000	200,000
暫定拡張事業	多摩川系地下水 (菅さく井)	昭和16年3月 ～ 19年9月	95,000	255,000
第4期拡張事業	相模川表流水 (相模湖)	昭和16年3月 ～ 31年8月	195,000	352,600
第5期拡張事業	相模川表流水 多摩川系地下水	昭和32年4月 ～ 39年3月	295,000	498,400
第6期拡張事業	相模川表流水 (津久井湖)	昭和36年4月 ～ 43年3月	385,000	732,000
第7期拡張事業	相模川表流水 (津久井湖)	昭和40年3月 ～ 46年3月	585,000	920,000
第8期拡張事業	酒匂川表流水 (丹沢湖)	昭和46年7月 ～ 56年3月	1,026,000	1,159,000

注 1. 第4期の相模川表流水水利権は15万㎡/日だが、既設多摩川伏流水(5万㎡/日)を休止したため、増量は10万㎡/日となる。  
2. 第5期は菅さく井取水増強5万㎡/日だが、休止中の多摩川伏流水(5万㎡/日)を復活したため、増量は10万㎡/日となる。

『川崎市議会史・資料編II』

## □質疑応答

Q：二ヶ領用水は、どこからどこまで流れているのですか。昔と現在について教えてください。

A：昔は中野島の隣、現在は布田という町名です。中野島村外何ヶ村用水組合と言っていましたが多摩区の中野島が一番上限で、川崎区の海辺までです。末流はほとんど海へ入り、余り水は多摩川に落としたりしました。

現在は、幹線水路が二つの取水堰から鹿島田の町田堀と大師堀に分かれるところまで残っています。すぐそばに先ほどの工業用水の平間浄水場があります。川崎市が管理しているところの大半は親水護岸化されています。ところが、変哲もない都市河川になっている部分があります。登戸の少し手前から二ヶ領用水の円筒分水のところまでは水路幅が広がっていますが、そこは神奈川県が管理している部分です。そこだけは親水護岸化されていません。

Q：先生の書かれた東京電気の藤岡市助の記事の最後のところに、東芝事業所内にあった藤岡市助の銅像がどこへ行ったかと書かれていますが、これは東芝ライテックの鹿沼工場へ置いてあるそうです。

A：そこに移設したのではなく、保管しているだけだと思います。

東芝は、芝浦系の田中さんの系列と東京電気の藤岡さんの系列と二つありまして、藤岡さんの銅像がなぜあそこあるのか。それと、山口喜三郎さん、新庄吉生の銅像さんがありました。東京電気の発展を位置づける重要な人物を東芝は知っていたから銅像にしたのです。藤岡さんは、川崎に移転する上で重要な役割を果たしました。立川勇次郎さんと組んで、その土地をいろいろ手配しました。また新庄さんは藤岡さんを支えて、アメリカのGEから資本導入するときに、重要な役割を果たし、後に社長になりました。山口さんは東京電気と芝浦製作所を合併させて東芝にしました。

3人の銅像をそろえて、ラゾーナの裏の公園のスペースに持って来るのもよいでしょうね。